日本医史学雑誌第五十一巻第四号　平成十七年五月
平成十七年十二月二十日発行　平成十七年十月二十二日受理　十九日受付

郷土史家　寺石正路の燈下与兒談における明治期の漢洋治療

松岡尚則[1)]・山下幸一[2)]
[1)]高知大学医学部腫瘍局所制御学
[2)]高知大学医学部麻酔・救急・災害医学

〔要旨〕明治期には脚気の流行が見られた。寺石正路によって書かれた燈下与兒談に浅田宗伯、遠田澄庵、松本順について書かれた部分を発見した。それぞれの治療と副作用について書かれていた。この資料によって遠田の治療について、矢数道明の調査が正しいことが示唆された。一人の人物が明治期の漢洋治療を受け、患者の立場から当時の名医の治療法、副作用に関して述べているという点において、興味深い資料であると考えられた。

キーワード――燈下与兒談、寺石正路、浅田宗伯、遠田澄庵、松本順

緒言

脚気の原因が解明される前であった明治期には脚気の流行が多くみられた。明治期に脚気治療として著明な遠田澄庵の治療は有名であるが、実際の遠田澄庵の治療は本人から明かされたわけではない。これらは、矢数道明の調査によって遠田の死後、判明したものである。[1] 寺石正路（一八六八～一九四九）は高知の郷土史家であるが、[2][3] 寺石が著した澄下与兒談[4]の中に、寺石が当時一流とされた治療医（浅田宗伯、遠田澄庵、松本順（良順））に対して治療を受けた記述を発見したので報告する。

方法

高知県立高知歴史民俗資料館および高知市立図書館に所蔵されている燈下与兒談の調査を行った。浅田宗伯、遠田澄庵、松本順に関して、過去の著書、彼らについて書かれた論文[5][6][7][1][8][12][13][14]を参照にした。

結果

寺石正路は明治一七年上京し、神田共立学校（のちの開成学校）に入学。翌一八年七月東京大学予備門（のちの第一高等中学校）に合格。九月から通学し、南方熊楠、正岡常規（子規）、秋山真之らと知り合っている。一九年健康不良のため帰省、静養。同年夏予備門中退している。（資料1）燈下与兒談によると、明治一八年五月浅田宗伯に、同年八月遠田澄庵に、同年一〇月松本順に診療を寺石は受けていた。浅田宗伯の治療（資料1、2）は「素より煎薬であった。」「大体非度き事は無かったので余り養生せずに、捨ててあった。」とあり、煎薬を使った薬物療法を施行され、副作用はみられず、食事療法はおこなわれていないようであった。遠田澄庵の治療（資料1、3、

4）は「赤豆と麦飯を食わしめ、下痢を掛くるいう簡単な荒療法」と記述され食事療法と薬物療法を行われているが、「これをもって脚気は全治したろうが、大変腹胃を損し、殊る慢性の胃弱を起こして、心身大変衰弱した」とかなり副作用（瞑眩？）の強い治療が行われていた。松本順の治療（資料1、5）は「なるべく牛肉の半熟を食せよ。」と食事療法を中心とした治療が行われており、はっきりとした副作用などは記載されていなかった。

考察

狩猟・採取生活から、農耕時代になり、一～三種類の穀物からなる主食を摂るようになると、人間は蛋白質、ビタミン、ミネラルの不足に起因する病気にときどき冒されるようになった。米の精製過程で脚気の予防に必要なチアミンが減少してしまうような場合である。これらは、主に新石器時代の農業革命がもたらした食生活の変化に起因するとユードキンは述べている。[9]脚気は東洋諸国特に、米食を行う我が国に頻発した風土病で、都会に多く、青少年や高貴紳顕を侵すものとされた。[7]江戸末期の俗世間では「青年子女を江戸に留学せしめて恐るべきは、放蕩と脚気なり」[10]と、称せられるほどであった。明治期に入っても静寛院宮親子内親王（和宮）が衝心脚気により死亡（明治十年六月）し、明治天皇自身も西南戦争中脚気に罹患（明治十年七月～十月）[11]している。こうした中で、明治十一年七月官立脚気病院が設立している。（明治十五年閉鎖）遠田澄庵はこの脚気病院の設立に関わっており、[12][13][11]第四区担当医師として脚気治療に参加している。遠田澄庵の治療は服薬中禁食規則[15]にみられるように、食事療法を中心に据え、これに投薬を行っている。[1]服薬中禁食規則[15]によると、「比薬ヲ服スル初日ヨリ二日間ハ塩ヲ断チ赤小豆ニ白砂糖ヲ加エ一日ニ三合位食スベシ」「三日目ヨリ塩気ヨロシ麦飯エ薄醤油ヲカケ食スベシ米ハ一粒モ入レルベカラス又米ノ上ニテ炊ベカラス野菜ハ残ラズヨロシク醤油汁ニ松魚節ヲ用ヒテヨロシ赤小豆モ毎日一合或ハ五勺位必ス食スベシ」とあり、赤小豆と麦飯を食事療法として使用していることが判る。また、矢数道明によると、[1]遠

田家伝脚気処方箋として薏苡仁の粉末、忍冬の粉末、大黄、硝石の処方構成で散薬として用い、散薬の処方の硝石を抜いた丸薬、または、川芎、山帰来、茯苓、大黄（少し）、ふるい残しの薏苡仁の荒い粉を煎薬として使用していた。いずれの処方も大黄が含まれており、瀉下作用はあったものと考えられる。燈下与兒談[1]には、「赤豆と麦飯を食わしめ、下痢を掛くるいう簡単な荒療法」という記述があり、遠田澄庵の治療内容と矛盾しない。矢数道明の調査は遠田澄庵の子孫より聞き取り調査の形で判明したものであり、遠田澄庵自身は、遠田家伝脚気処方を家伝の秘密として語っていない。この療法の副作用（瞑眩？）として「これをもって脚気は全治したろうが、大変腹胃を損し、殊る慢性の胃弱を起こして、心身大変衰弱した」と燈下与兒談に記載されており、瀉下作用のある生薬を含む処方と消化が米と比べて悪いとされる麦飯を食す療法と副作用の点で合致する。燈下与兒談によって、遠田澄庵の処方についての矢数の調査内容が作用・副作用の点からも正しいものであることが示唆された。

浅田宗伯は、安政二年（一八五五）幕府のお目見得医師となり、文久元年（一八六一）将軍家茂に謁見し、徴士の列に加えられ、また、慶応元年（一八六五）フランス公使レオン・ロッシュの難症を治し、翌慶応二年、将軍昭徳の病を診して脚気衝心とし、大奥の待医となり法眼の位を授けられるなど、江戸期より著明な医師であった。[15]明治に入っても官立脚気病院に対抗する姿勢で明治十一年七月に発足された博済堂病院にも院長として関わっている。[3]浅田宗伯は「須量人之盛衰微加滋補」[11]と述べており、遠田澄庵のように瀉下作用のある投薬などは勧めていない。燈下与兒談[4]の中でも「素より煎薬であった。」「大体非度き事は無かったので余り養生せずに、捨ててあった。」と述べており、薬物療法（煎薬）を使用し、養生（食事療法）などは行われていなかった。これには、本人の病態も軽かったため、放っておいたこともあると考えられる。

松本順は、初名を良順といい、安政四年（一八五七）幕府の命により長崎へ赴任、来日のオランダ軍医ポンペの助手として近代医学教育に従事し、日本初の西洋式病院である長崎養生所開設に尽力する。慶応元年、将軍家茂の

侍医として、法眼に叙せられる。明治元年、朝敵として捕らわれ禁錮となるが、赦され、東京に出ると早稲田に病院を設立。明治四年に兵部省に出仕し軍医頭。明治六年初代軍医総監となり日本の陸軍軍医制度を確立。二三年貴族院議員に選出。男爵を授けられている。[16] 燈下与兒談[1]によると「元の陸軍軍医松本順先生の診察を受けたれば」とあり、寺石が受診した明治一八年一〇月の状況と一致する。「余を極めて貧血なりといわれ、なるべく牛肉の半熟を食せよ」と言われ、遠田の治療の後発症した胃腸障害に加え、貧血を併発していたおり、食事療法が取られている。燈下与兒談[1]にはこの療法に対して、はっきりした副作用などはかかれていなかった。松本順の原病各論　巻十第二套　運動神経諸病パラキネシア第二区運動神経減殺病ヒホキネシア第三章ベリヘリア[7]によると、脚気の治療法に「易化滋養物ヲ含ム新鮮ノ獣植ヲ食セシム」とあり、これは、寺石が受けた治療法と一致するため、貧血のみならず脚気に対する治療として牛肉の半熟を食すという療法をとられた可能性もあると考えられた。

総括

明治期の漢洋それぞれの治療で名医とされる浅田宗伯、遠田澄庵、松本順の治療を受けた記述を燈下与兒談中に発見した。遠田澄庵の処方についての矢数の調査内容が作用・副作用の点からも正しいものであることが燈下与兒談によってさらに、示唆された。一人の人物が漢洋治療を受け、患者の立場から当時の名医の治療法、副作用に関して述べているという点において、興味深い資料であると考えられた。

本論文の要旨は第五四回日本東洋医学会総会（福岡、二〇〇三年五月）にて報告した。

謝辞　寺石正路氏の子孫にあたる森尾靖子氏には格別の配慮をうけたことに感謝いたします。また、高知県立高知歴史民俗資料館、高知市立図書館、武田科学振興財団に対して資料提供等に感謝いたします。

文献

(1) 矢数道明：温故荘雑筆　遠田澄庵家伝の脚気薬処方箋について、漢方の臨床三六巻九号、一六五〇―一六五三（一九八九）
(2) 野本亮：土佐・郷土史の父　寺石正路の足跡　高知県立歴史民族資料館、高知（一九九九）
(3) 岩井寿夫編：高知県人名辞典 新版　高知新聞社、高知（一九九九）
(4) 寺石正路：燈下与兒談　（一九一八）高知県歴史民俗資料館蔵
(5) 浅田惟常（宗伯）刪訂：博濟堂脚氣提要　博濟病院編纂（一八七九）東京博濟病院排印本　武田科学振興財団蔵
(6) 浅田惟常：皇漢醫學叢書脚気概論　論脚氣滋養諸法　世界書局、東京（一八七九）武田科学振興財団蔵
(7) Johannes Lydius Ctherinus Pompe van Meerdervoort（朋百）口授、松本順筆記：原病各論（一八五七）
(8) 矢数道明：明治初期漢洋脚気病院設立の裏面史とその治療成績について、漢方の臨床一七巻七号、三八三―四〇一（一九七〇）
(9) Yudkin J.:Archaeology and the nutritionist. The Domestication and Exploitation of Plants and Animals. 547-552, Aldine-Atherton, Chicago（1969）
(10) 山崎佐：日本疫史及防疫史、八四三、克誠堂、東京（一九三一）
(11) 宮内庁：明治天皇紀　吉川弘文館、東京（一九六八―一九七五）
(12) 矢数道明：東洋漢洋脚気病院の遠田澄庵をめぐって、漢方の臨床、二三巻七号、三八七―四〇二（一九七六）
(13) 矢数道明：漢洋脚気病院の遠田澄庵について、日本医事新報、二六九〇巻、一三五―一三七（一九七五）
(14) 矢数道明：遠田澄庵補遺、漢方の臨床、二三巻一一号、六七八―六八〇（一九七六）
(15) 遠田澄庵：服薬中禁食規則 大日本東京牛込区市ヶ谷船河原町拾七番地 遠田脚気病院（一八？？）

（16）大日本人名辞書刊行会編纂：大日本人名辞書　第三版、講談社、東京（一九七七）

資料1

高等学校入学

余は上京後、身体も健康であったが、十八年の五月頃より脚気を微し、水腫を覚へた無論脚気であった。牛込で名高き漢方大医の浅田宗伯先生に診て貰らって薬を賜った。素より煎薬であった。大体非度き事は無かったので余り養生せずに、捨ててあった。此頃大學予備門は学制の変で名称を改め東京第一高等中学校と称し野村彦四郎先生が校長となって其新任の気概があった。然るる此に余は健康の常態を失して豫定の目的を廃し生涯の運命は一大改革を起すといふ、不幸の情況に立至ることが起こった。之は余は兼て五月頃より脚気をかしていたが、夏期八月中、人の勧めより牛込の脚気専門医遠田澄庵氏の治療を受けたが、余氏は赤豆と麦飯とを食わしめ下痢を掛くるという簡単な荒療法で余はこれをもって脚気は全治したろうが、大変腹胃を損し、殊る慢性の胃弱を起こして、心身大変衰弱した。是より余は生涯胃腸を最初の健全状態に復する事を認ぬ。人の療病に従事する者も注意せねばならぬ。当時の症状は胃大に拡張し、食欲振はす。食後は一種言ふべからざる不快を感じ、身心倦怠し、大に意気の消沈を覚へた。十月頃余は牛込の片隅に退院せられ至たる。元の陸軍軍医松本順先生の診察を受けたれば、先生は一診して余を極めて貧血なりといわれ、なるべく牛肉の半熟を食せよと。言われた余は依て牛肉やに参り脂肪の無き、正味の赤肉を注文し、半熟の屍之を食した。かくの如くする。一ヶ月ほどして再び診察を乞いたれば先生は余の血色は余程員敷ありたり。追に、快治に向ふべしといわれ余も非常に嬉しく感じた。然ちに、十一月頃学校帰途に蒸れ感冒を感じ、大発熱となり、四十度近き熱を発せしは、チフスに非ずやといわれ憂慮したりしも、八大氏等の介抱により二三に発汗をとりつけ漸く快復したり、かくて腹胃は元の如く悪くなり不愉快極りなりき。明治一九年に入りても健康回復せず。

資料2

皇漢醫學叢書脚気概論　（浅田惟常著述　世界書局　一八七九）

論脚氣滋養諸法

脚氣固忌補。古人有傲戒。然其人精気虚。麻痺痿弱不振者。非滋補剤不能起之。濟生方云。入冬己後。須量人之盛衰微加滋補。不然則氣血日衰。必年々遇蒸熱而作。理之必然也。

資料3

服薬中禁食規則

一、比薬ヲ服スル初日ヨリ二日間ハ塩ヲ断チ赤小豆ニ白砂糖ヲ加エ一日ニ三合位食スベシ尤モ分量ハ適宜ナリ湯水及ヒ果実ハ宜ク其外一切食スベカラズ

一、三日目ヨリ塩気ヨロシ麦飯エ薄醤油ヲカケ食スベシ米ハ一粒モ入レルベカラス又米ノ上ニテ炊ベカラス野菜ハ残ラズヨロシク醤油汁ニ松魚節ヲ用ヒテヨロシ赤小豆モ毎日一合或ハ五勺位必ス食スベシ

一、禁物ハ米、味噌、酒、鳥獣ノ類、鶏卵、牛乳マテ厳禁スベシ野菜ノ中ニテハ生姜、芥、山葵、蕃椒、山椒ノ類ヲ忌ム又諸服薬ヲ禁ス

一、脚気ハ死病ニ非ス人ノ死生ニ関スル病ナレバ患者コレヲ軽忽ニスベカラス右之通ニ早ク禁食服薬スレバ其ノ症ニ因リ平快ニ固ヨリ遅速ハアレトモ必ス平癒スルコト疑ヒナシ又胃病心臓病或ハ肺病ト診察ヲ誤ルコトアリ可恐可懽忽ニスベカラス

大日本東京牛込区市ヶ谷船河原町拾七番地

遠田脚気病院

資料4

遠田家伝脚気処方箋散薬

薏苡仁の粉末、忍冬の粉末、大黄、硝石

丸薬

重い病人には散薬以外に丸薬として使用。

（年をとった病人には使用せず）

普通の病人には散薬の他に丸薬を使用。

これは散薬の処方の硝石を抜いたもの。

煎薬

川芎、山帰来、茯苓、大黄（少し）、ふるい残しの薏苡仁の荒い粉

資料5

原病各論　巻十第二套　運動神経諸病パラキネシア第二区運動神経減殺病ヒホキネシア第三章ベリヘリア

病　論　是レ一種ノ麻痺病ニシテ　其ノ原ハ推髄ヨリ出テ以テ病者一種ノスワーイーンヲ運動ヲナス風土病　印度亜細亜ノ諸方ニ発ス　殊ニ泥湿ノ地鉱属ヲ出ス地方ニ生ス　本発　続発　虚実急一日ヨリ二日　半急慢

転　皈　快　慢徐々ニ回復ス

死　脳麻痺　胸器ノ麻痺及ヒ虚労

誤　解　他性麻痺病　全身水腫　急性ト悪性間歇熱

原　因　素　若年老人男子　風出発地殊ニ泥瘴ノ海岸　鉱土殊ニ錫土　天気寒湿反覆スル者　早時麻痺ヲ患フル者

放肆ノ修身

誘　諸種ノ泥游ノ発越　冒寒夜間戸外ニかス者　脂油塩蔵物ヲ長ク服スル者　鬱憂ナリ

症候

急症　初メハ麻痺熱ニ同キ症ヲ発シ　足ヨリ初マリ常ニ増進シテ胸ニ及ホス　麻痺上部ニ升ルニ依ルニ依テ弥々煩悶著シク　皮膚熱灼　尿緊疾時ニ洪　大便難時ニハ嘔気　病胸中ニ入ルノ後ハ劇煩悶　若クハ窒息ヲ以テ死ス。○脊推ヲ探索スルニ　肩脾間トキニハ腰推ニ激痛ヲ覚フ　蓋シ其ノ疼推脊ニ血積多少ニ応シテ異ナリ　若シ死セサレハ病症ヲ切去シ得テ慢性ニ転ス　病ハ煩悶鬱憂絶ヘス　甚タ希レニハ此ノ症ヲ扶私症ヲ兼併ス　之レ必死ノ候トナス

按

曰予　諸種屍ヲ解クニ　脊推疼痛ヲ覚フ処ニハ必ス血積ヲ見ル　尚且軽易ノ炎ヲ発見スルヲ見ル

慢性症

倦怠鈍麻強梗ヲ下肢ニ覚フ　初ハ跗ニ初リ漸ク升リ　成ハ其ノ後蟻蔔神経痛ヲ下肢ニ如キ者アリ　全身虚脱ス　苦煩鬱憂惨憺　皮膚寒冷　唇乾キテ赤ク　舌潤ヒテ黄白　渇甚シ　尿鮮ク其色赤シ　大便常ニ秘結ス　屎ハ白ク或ハ淡黄之レニ未熱ノ食物ヲ混ス　通例胸腹脳皮膚水腫ノ見症ヲ発露ス

経過中変化

漸クニ諸症増ストキニハ　挙ル処ノ見症ノ如ク順序ナラス　或ハ漸々諸症減シテ治ス　或ハ急性症ハ昏睡窒息ヲ以テ死ス　慢性症ハ虚労全身水腫ヲ以テ死ス

予後

凶　若シ病初ニ之ヲ制セサレハ　急性症ハ急死シ易シ　回復時期ハ太タ長シ　而シテ再発ノ傾キ易キコト太タ大ナリ

治法

第一　将来ノ諸症ヲ制伏スルニアリ　法方　急性ノ者小刺絡トキニハ之レヲ反復スヘシ　甘汞　一日十五仏キナ塩　一日二三十仏ノ合剤　藤黄峻下剤ノ之レヲ多量ニ服セシムレハ初メニ載除スヘシ　慢性症ハ甘汞海葱ノ合剤　血角ヲ推髄ニ沿フテ貼ス　而シテ少量ノキナ塩ナリ　第二　排泄分泌ヲ催進ス　発汗剤殊ニ微温浴安質剤　○引赤方皮刺戟　推髄ニ沿フテ長径ノ芫菁膏ヲ貼ス　蓋シ長ク貼スヘカラス一ニ時ヲ以テ足レリ　引赤ノ初竜脳ヲ癒瘡木煎ニ加フ汁殊ニ少量ノ良火酒又今キナ塩少量ノ軟鉄効アルコトアリ　常ニ注意シテ快通利ヲトルヘシ　第三　諸症ヲ制ス　法方　麻ひニハ外用揮発刺戟ノ擦薬フラヌルヲ以テ病処ヲ綿帯ス　芫菁膏海水浴　内服ニハキナ滋養ノ食物殊ニホミカイヱキスニキナ塩ヲ加フ　○虚性ノ脳胸血積ニハ遠隔ノ部ニ皮刺戟水蛭血角ヲ第初期ニ行フ　末期ニハアルニカノ菴貼及ヒ乾摩ヲフラネルニテ行フ　悪心嘔吐ニハ芳香硬膏芫菁膏或ハ芥子泥ヲ胃辺ニ行フ　全身虚脱ニハキナ剤軟製鉄剤プロチーネ美酒美麦酒類ニ興奮スル

薬剤　全身局処ノ水腫ハ其法方ニ依テ治スヘシ
一定処筋麻ニハヱレキトル点滴浴　末期ニ及テハ此ノ方尤モ効アリ　摂生　清涼ノ乾キタル空気　殊ニ山気温
湿ヲ避ク殊ニ泥瘴ノ住居ヲ禁ス　易化滋養物ヲ含ム新鮮ノ獣植ヲ食セシム　水美酒麦酒少量ノ火酒ヲ用フ
毛布ノ衣服皮膚ノ寒冷ヲ禁ス　温浴トキトシテ殊ニ効アリ　四肢ヲ常ニ運用スヘシ　安逸刺戟ヲ禁ス　殊ニ
過飲過房ヲ禁ス

Oriental and European Medicine in the Local Historian Masamichi Teraishi's Book

Takanori MATSUOKA and Koichi YAMASHITA

There was a prevalence of beriberi in the Meiji era. We found articles about Souhaku ASADA, Syouan TOUDA and Jun MATSUMOTO in the Toukayogeidan, written by Masamichi TERAISHI. The book tells about the treatment and its side effects. This book reveals that Doumei YAKAZU's investigation was correct. It is of interest to learn from this book how one patient consulted doctors in the Meiji era and talked about the treatment and side effects of the doctors.